

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23310176

研究課題名(和文) 紐帯としての日本語 日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究

研究課題名(英文) Japanese Language as a Bond: Language-Life Study for Japanese Community, Nikkei Community and Japanese-speaking peoples Community

研究代表者

野本 京子(沼田京子)(NOMOTO, Kyoko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：90208281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,100,000円、(間接経費) 4,230,000円

研究成果の概要(和文)：当初、日本語の言語としての機能的な部分を重視していたが、想定範囲を超える「紐帯」を発見できた。言語が持つもう一つの機能の「象徴性」が各コミュニティで強く働いており、日本語運用能力に関わらず、ローカライズされた言語文化が地域に息づいていた。

ローカライズした言語文化と、ローカライズされない日本語文化の在り様も確認した。インドネシアにおける「日本語教育」と「日本語使用」の区別という視点、「紐帯としての」ポップカルチャー」が進行するブラジル、継承日本語教育が活発な台湾でのジレンマを確認した。本研究は、世界を席卷するグローバル化のもとで迫られている新たなパラダイムの構築に資するものと考えられる。

研究成果の概要(英文)： This research tried to seek for the characteristic of its community-ness of the language as a medium. In this sense, the research focused on the functional aspect of the language before we began the investigation. However, through the research, we found some functions of the bond much more than we imagined. Symbolic-ness, every language shares as one of the functions, is strongly performing in every community. Even the society in which there are some unfamiliar members with Japanese, nonetheless, localized language culture is established there.

At the same time, the co-existing situation in which localized language culture and not localized culture in a society is identified. The functional bond of Japanese is realized by a localized and mutable phenomenon on the one hand and an immutable phenomenon on the other hand. It also propounds the fundamental condition for establishing an alternative paradigm for Japan studies.

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：基盤研究(B)

キーワード：日本語 日系コミュニティ 日本語人 社会言語 オーラル・ヒストリー 生活言語

### 1. 研究開始当初の背景

まず、生活言語面に注目した研究には、本研究の研究分担者である前田達朗の在日コリアンの生活言語調査と生活誌調査がある(真田信治・生越直樹・任榮哲編『在日コリアンの言語相』、和泉書院 2005 年)。この研究から、多言語社会においては、コミュニティの紐帯となることに言語の機能と役割があることが意識された。これは学校などの制度化された場所での言語使用と異なる、生活言語の機能と役割に注目した研究でもある。グローバルに展開する日本語の調査に関しては、これまで、戦前の移民・植民政策との関係からの言語政策研究(安田敏朗、陳培豊など)、移民社会での言語変容やクレオール化についての社会言語学的調査(D・ロング、真田信治など)、移民社会の日本人学校・日本語学校における言語使用や言語意識調査が成果を残してきた。これらの研究では、エスニシティとしての「日本人」とそのエスニックアイデンティティの観点からの関心が強いといえることができる。

### 2. 研究の目的

本研究は、海外で日本語が存在する国・地域に共通する指標を紐帯としての日本語に求め、その集団の由来の相違からカテゴライズされた3つのコミュニティ(「日本人社会」「日系コミュニティ」「日本語人」)における日本語の役割の調査研究を、生活言語と生活誌の調査と、それらの地域群の比較を通して行うものである。すなわち日本語を紐帯として形成されるコミュニティとその成員のアイデンティティ形成の調査研究である。本研究は社会言語学の量的・質的調査とオーラルヒストリー調査の方法を採る。かくして海外における生活言語としての日本語を動的に把握し、社会言語学と生活・文化誌研究とをつなぐ複合的な地域研究の方法論の確立を目指した。

### 3. 研究の方法

「日本人社会」において調査対象とする集団の中心は、日本人学校・日本語学校・補習学校である。ただし調査は学校に限定せず、構成員の家庭も対象として、日常生活言語と家庭内使用言語などドメイン別の使用言語、言語意識(日本語、現地語、言語能力の自己評価)に遡及した調査を、共通の調査紙法を用いた多量調査、統計学的調査として行う。「日系コミュニティ」

「日本語人」の地域においても日本人学校・補習校が現地に存在する場合には、それを中心とした「日本人」もしくは「日系人」コミュニティについて同様の調査を行う。同時にインタビューによる質的調査にも比重を持たせる。こうしてライフヒストリーを調査する質的調査としての生活誌的

調査も行う。上記の調査を遂行するため、調査主体は統一したマニュアルと調査紙法を用いる。また、可能なかぎり言語研究者と歴史・文化・生活史研究者とを組み合わせる。

### 4. 研究成果

計画では、日本語と日本語を媒介としたものを「紐帯」と呼び、そのコミュニティ性を追求しようとした。つまり日本語の言語としての機能的な部分を大きく捉えていた。しかし調査を経て想定していた範囲を超える「紐帯」を発見することができた。言語が持つもう一つの機能である「象徴性」がそれぞれのコミュニティで強く働いていた。すなわち日本語運用能力は実用的ではない構成員がいたとしても、ローカライズされた言語文化がそれぞれの地域に息づいていたのである。

同時に、ローカライズした言語文化と、ローカライズされない日本語文化のありようも確認された。「日本語」の紐帯機能は、ローカライズによる変化と、ローカライズされない不変性をもつ、機能の二重性をとおして実現されている。

日本語そのものから離れた日系人の文化のローカライズ化と非ローカライズ化の二重の事例は友常の北米調査に見て取れる。仏教会を中心としたコミュニティはもはや英語でのみ動いているかのように見えるが、確実に彼らの文化である。ただし他方で、県人会を中心とした民謡協会のような組織では、「日本でやっている通りにする」方針にもとづいて運営されている。それはナショナル・アイデンティティというよりも、他のエスニック集団との競合・競争のない関係が維持できるという効果を期待してのことである。

日本語としてはもはや意識されない日本語由来の語彙や習慣はパラオの河路調査でより明らかになった。多くの日本語話者が、日本語読み書きの能力を持たないというのも特徴的である。観光産業で働くという目的を考えれば、オラリティが重視されるのは当然である。日本人観光客の存在を意識して日本語普及の取り組みはあるが、観光業には日本人がついてしまうというジレンマも確認された。

同様に特定の目的に特化された日本語の事例を降幡のインドネシア調査に見ることが出来る。インドネシアは中国に次いで日本語学習者が世界第二位である。その際、「日本語教育」と「日本語使用」(どのように日本語を生かすか)の二つが区別されるべきであるという報告は示唆的である。日本語に対する期待を理解したうえで日本語教育が必要であるということだろう。

また前田の韓国調査では日本語話者であるという意識がない話者集団の事例が捕捉できた。エスニックには日本人ではない集団が、その紐帯を日本語能力に求めている

事例でもある。

日系移民社会の長い歴史を持つリオデジャネイロでの調査と、ブラジル北東部において「ポップカルチャーの受容を調査した武田の場合には、日本語のローカライズを超越した現象が確認された。日系人のほとんどいない北東部で「ポップカルチャーのイベントが多い」という事実である。ここから、「紐帯としての」ポップカルチャー」でもいうべき事態が確認できる。すなわち「日本のもの」というとりかかりではなく「好きなもの」がたまたま日本のものであったということである。魅力あるコンテンツの提供が日本語と日本文化の生産力として求められていることがわかる。

日台国際結婚家庭の成立パターンの多様化と、継承日本語教育の実情を調査した谷口の台湾での調査は、非ローカライズ化の事例でもある。継承日本語教育の動きは日台国際結婚家庭の日本人配偶者や子どもたちにとっての拠り所となるが、台湾人家庭とお差別化を助長するなどのジレンマが予想される。

ドミニカ共和国での日系人コミュニティの活動を調査した研究協力者の窪田は、ドミニカ移民の一世、二・三世における言語継承意識の差異を明らかにした。一世の言語継承意識は高いが、二世になると機能的な場面でスペイン語を使用し、家庭内会話や一世との会話でしか日本語を使用しなくなっているなどの現状が明らかになった。

通時的研究としては高嶋の奄美移民の外地（ここでは台湾）での日本語獲得の事例があげられる。1930年代から1953年の復帰前後までの経験を対象とした聞き取り調査で、「国語」「標準語」ということばによる紐帯が強いられたこと、しかしことばによる紐帯は幾重にも異なり、連なっていることが確認された。

総じて本研究は、世界を席卷するグローバル化のうねりが影響を及ぼしている日本語・日本研究の研究条件を理解するための基礎調査であり、現在迫られている新たなパラダイムの構築のための基礎研究となっている。

なお、研究計画最終年度の集約として、公開研究会「ブラジルの日本語・日本文化受容の一事例」を開催した。研究会はブラジル調査の研究協力者であったリオデジャネイロ州立大学のキタハラ高野聡美氏による報告と、それに対する中京大学・ましこひでのり氏からのコメントを通して、「日本人社会」「日系コミュニティ」「日本語人」といった概念と実態に関する討議をおこなった。さらに、研究分担者11人の論考を収録した成果報告書「紐帯としての日本語」を発行した。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

##### [雑誌論文](計9件)

谷口龍子、日本語排除から日本語受け入れへ戦後日本における言語政策、社会的環境の変容と継承日本語との関わり、東京外国語大学論集 86号、査読無、2013年、159-173

ISSN 0493-4343

野本京子、日本農村における国際結婚 その推移と農村社会、韓国日本語文化学会、25巻、2013年、査読無、5-20

ISSN 1598-9585

友常勉、差別と共生の政治文化 部落差別と日本型規律権力について、韓国日本語文化学会、25巻、2013年、査読無、41-61

ISSN 1598-9585

前田達朗、鹿児島県の国語教育における標準語/方言イデオロギー 戦中の「指導書」と戦後の教育雑誌をてがかりとして、『日本語・日本学研究』第3号、2013年、査読有、23-42

高嶋朋子、大島農学校をめぐる人的移動についての試考、『日本語・日本学研究』第3号 2013年、査読有、43-58

降幡正志、東京外国語大学外国語学部における主専攻語の授業編成と評価 - インドネシア語専攻を例として、東京外国語大学世界言語社会教育センター『国際シンポジウム報告集 2011: 高等教育における外国語教育の新たな展望 - CEFR の応用可能性をめぐって』、2012年、査読無、127-143

Shiohara, A. and Furihata, M. (降幡正志)

“Plural infix *-ar-* in Sundanese”, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『アジア・アフリカの言語と言語学』、2012年、査読無、89-107

降幡正志、スング語、『東京外国語大学オープンアカデミー2011年度後期公開講座「外語大の教師が熱中するもうひとつの言語」活動報告書』2012年、査読無、57-75

呉翠華・谷口龍子、論児童歌謡教育と生活美学の関係 - 以日本唱歌、童謡教育為例 -、謝登旺編著『生活美学と芸術』、2012年、査読有、211-225

##### [学会発表](計9件)

友常勉、部落差別と日本型規律権力 (招待講演) 国際基督教大学平和研究所、2013年9月19日、国際基督教大学

武田千香、ササキ・マサエ・エリーザ、ブラジルにおける日本人移住と日本ポップカルチャーとの関係、第14回ラテンアメリカ・アジア・アフリカ学会世界大会、2013年8月13日-17日、

窪田暁、ドミニカ系移民にとってのスペイン語 関係構築の資産としての母語、日本移民学会第23回年次大会ラウンドテーブル『移民言語の生かし方 移民コミュニティにとって』、2013年6月30日、武蔵大学

野本京子、日本農村における国際結婚 その推移と農村社会 (招待講演) 韓国日本語

文化学会、2013年6月1日、韓国 慶熙大学  
校

友常 勉、差別と共生の政治文化 部落差別と  
日本型規律権力について(招待講演) 韓国日  
本言語文化学会、2013年6月1日、韓国 慶  
熙大学校

武田千香、ササキ・マサエ・エリーザ、ブラ  
ジル北東部日本ポップカルチャーフィールド  
報告、第6回東洋古典文学会/第2回東洋文  
学全国大会、2013年5月7日、リオデジャネ  
イロ州立大学

野本京子、日本における「国際日本学」をめ  
ぐる動向、中華日本学会主催 第3回東アジ  
ア日本研究フォーラム、2012年12月4日、  
北京日本学研究中心

友常 勉、「二世プロGRESSIV」: 戦後北米に  
おける日系左翼の思想、カルチュラル・タイ  
フーン広島大会、2012年7月15日、広島女  
学院大学

Furihata, M. and Shiohara, A (降幡正志)  
"Plural infix *-ar-* in Sundanese"、The  
Third International Symposium On The  
Languages Of Java (Isloj3). State Islamic  
University of Malang, 23-24 June 2011, State  
Islamic University of Malang, Malang, East  
Java, Indonesia

〔図書〕(計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

野本 京子 (NOMOTO, Kyoko)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究  
院・教授  
研究者番号: 90208281

### (2) 研究分担者

武田 千香 (TAKEDA, Chika)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究  
院・教授  
研究者番号: 20345317

中野 敏男 (NAKANO, Toshio)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究  
院・教授  
研究者番号: 10198161

河路 由佳 (KAWAJI, Yuka)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究  
院・教授  
研究者番号: 00272641

降幡 正志 (FURIHATA, Masashi)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究  
院・教授  
研究者番号: 40323729

谷口 龍子 (TANIGUCHI, Ryuko)  
東京外国語大学・国際日本研究センター・  
准教授  
研究者番号: 20570659

友常 勉 (TOMOTUNE, Tsutomu)  
東京外国語大学・国際日本研究センター・  
准教授  
研究者番号: 20513261

前田 達朗 (MAEDA, Tatsuro)  
東京外国語大学・国際日本研究センター・  
准教授  
研究者番号: 60590750

高嶋 朋子 (TAKASHIMA, Tomoko)  
東京外国語大学・国際日本研究センター・  
研究員  
研究者番号: 60600442

### (3) 研究協力者

窪田 暁 (KUBOTA, Satoru)  
国立民族学博物館  
外来研究員

キタハラ高野 聡美 (KITAHARA TAKANO, Satomi)  
ブラジル・リオデジャネイロ州立大学  
准教授